

聞き取り調査

徴兵検査から復員まで

岩手県 岩間 栄 一

昭和十六年、横浜市鶴見区豊岡小学校で徴兵検査を受け、甲種合格となりました。

昭和十七年一月十日、東京都渋谷区にある東部第一三部隊に入営いたしました。所属は、十五センチ榴弾砲兵で乗馬観測でした。東京都渋谷区駒沢練兵場で三月の間訓練を受け、満州に渡るため、昭和十七年四月七日、東京都品川駅より乗車。呉港に向かい、貨物船で玄界灘を経て満州国大連に上陸し、満州鉄道で綏西に到着。満州第一〇二部隊第一二中隊に転属、国境

守備の任に従事いたしました。

昭和十九年五月二十日、奉天の満州第三八六部隊に転属し、製鉄作業隊が結成され、同年六月一日、辻隊に配属され、奉天満州住友金属株式会社において製鉄作業に従事し、精錬の業務を行いました。

昭和二十年八月十五日停戦命令が下り、無条件降伏するようにとのこと。前日までに掘った戦車壕の埋め立てに力が尽きる思いで作業をしました。ソ連軍の、無抵抗な日本人（軍人・一般人を含む）に対する略奪や婦女に対する暴行を耳にしました。近くにある北陵大学が日本軍収容所となり、差別なく拉致して収容させられたほか、工場内に有蓋貨車を誘導して、ソ連に持ち込むため、工場内の設備・電話機・窓ガラスに至るまで積み込むという作業をする毎日でした。私達は

住友金属の会社の制服を着ているので社員と思われる
いたようでした。

満州地区には六十万人の日本軍がいたと收容所の方
では放送して、鑑札を持っていないと殺されること
になるので、すぐ奉天市役所に鑑札をもらいに来よう
にと言われました。今日は駅前、明日は何町というよ
うにして集まった人を包囲して、軍人でない方も收容
し始めました。私達は現役の軍人ですので、見るに見
かねて二個小隊がトラック三台、マーチョ（小柄の荷
馬車）十台に兵器、爆薬を積み、昭和二十年九月二十
五日、日本軍收容所に出頭いたし、両手を挙げて降伏
いたしました。金物は、スプーン、フォーク、箸に至
るまで全部取り上げられました。

いよいよ日本ダモイ（帰国）のかけ声で、持てるだ
け沢山持って、但し、一旦ソ連領を通らなければ代償
をもらえないということで、一個列車千五百人単位で
編成され、十月初旬に有蓋貨車に食糧（米・砂糖・小
豆・大豆等）を積み込み、毛布を敷き、その上に私達
が乗り、奉天駅を出発いたしました。一日走ってはと

まって、野原に出て食事の用意をしたりしながら、十
月二十六日、満州国黒河より食糧を運び、ソ連領に渡
りました。何もない野原に立たされ、ちょうど日本の
入梅期と同じでジワジワした霧雨が降り、時には大雨
となったりして寒く、休む所もなく、寝る所もなく、
夜になると立っただまま五十人単位で輪を作り、弱って
いる人を真ん中にして寄り添って過ごしましたが、首
から入った雨水がお腹や背中を流れ、寒さに曝される
こと数日でした。

「汽車が来た」の声で見ると、大きな蒸気機関車が
有蓋貨車を押して来たのです。日本の貨車は小型十ト
ン、中型十五または十七トン、大型三十トンでした
が、ソ連の貨車は小型三十トン、中型五十トン、大型
七十トンと、大きさが違います。この貨車に乗り込み
発車。列車は東へ東へと進みます。もうすぐナホトカ
かなと思っているうちに、ドカンという音とともに列
車は止まりました。と同時に、貨車の外から錠がかけ
られました。列車は反対方向に走り出しました。望み
の帰国の夢は断たれました。今まで走った線はシペリ

ア鉄道の支線だったのです。

列車は走り続けて数日、着いた所はチタ市でキノンの湖畔だったのです。

数日、食事も与えられず携帯食で過ごしてききました。着いたら食事を与えるとのことでしたが、今夜は遅いから明日与えるとのこと、またも騙されました。一晩中、あちらこちらで飯盒でご飯を炊く姿が見受けられました。

荒れ果てた収容所に入れられ抑留生活が始まり、昭和二十年十月三十日より、土木建築及び伐採作業に従事いたしました。

第一番目の仕事は、自分達が入っている収容所の周りに杭を立て鉄条網を張る作業で、地面は凍りなかなか掘ることが困難で、「ダワイヴィストラ、ダワイヴィストラ（早くやれ）」と言われるばかりでした。

食糧は少なく、お米のとき汁のような重湯を飯盒一個、五人で分け、一人分は中ごう一杯に米粒（炊き切れたもの）十数個くらい、または昆布だけの日、大豆だけの日と、誠にお粗末な食事でした。また、水も一

人一日三合で、歯を磨き、手足を洗って、飲み水にもしなければなりません。ほとんどの人が栄養失調となりました。寝床は蚕棚式で、一メートルくらいの高さで三階まで、一間に六人で頭、足を交互にして休みました。

着のみのまま、六カ月が過ぎました。虱の大発生です。背囊を枕に寝ていると、寝返りする度ぶつぶつと音を立ててつぶれ、頭の後ろに手をやると真っ赤な血が付きました。服を脱ぎ、縫い目の所に溜まった虱は、缶詰缶が三回くらいで盛り上がったものです。梁を動く虱の音が、ちょうど蚕に桑を食わせたようにジャワジャワジャワと大きな音を立てて行列を作って動く姿も、体力がないためどうすることもできませんでした。

そこで、部隊長から命令が出ました。暇があったら虱を取れ、取った虱は全部食え、虱には血と栄養がある。この命令は、私、終生忘れることはないと思います。

シベリアは寒く、チタ市の記録は零下七十七度の石

標があると聞かされましたが、私達が体験したのは零下六十八度と記憶いたしております。朝は九時頃朝日が出て、夕方は午後三時頃を過ぎるとお日様が沈み真っ暗になります。また夏は反対で、午前三時頃より朝日が出て、午後八時になってもお日様が輝いていたりします。

春ともなれば、一斉に農作業が始まります。私達も馬鈴薯の種芋蒔きを命じられ、整備兵に引率され農場に着きました。見渡す限り平坦で、広大な土地です。トラック一台に満載した種芋を、三十人くらいの人数だったと思いますが、これが一日のノルマ（仕事）です。スコップで土を掘り、種芋を蒔いては次々と作業するのですが、なかなかトラックの種芋は減りません。監視の間を見ては二個ずつ、または三個、五個、あるいはバケツ一杯等蒔いて予定時間より早く終わりを、帰りました。蒔いた区域も百メートルくらいでした。不審に思ったソ連の監視兵が次の日は区域を指定して作業に移りましたが、人が歩いて行くと足が見えなくなり、だんだんと体、頭と見えなくなっていきま

す。そこで、地球は丸いんだなあと思ったものです。初めのうちは三十センチくらいから五十センチ、メートル、監視の間を見ては二メートル、五メートルと飛ばし、作業いたしました。

「スコラ・ダモイ（もう直ぐ帰れる）」の掛け声で蒔いたものですが、収穫期となり、芋掘りをさせられるとは夢にも思いませんでした。いよいよ馬鈴薯掘りの時期となり、出勤命令が下り、私達が行くことになりました。いつもの通り引率兵に連れられ農場に着きましたところ、生えている所は林の如く茫々と伸び、生えない所は十メートルも空き地同然です。それを見たソ連の係員は、今年はお前達には馬鈴薯は食わせられないとのことでした。

十月も過ぎ寒くなると、暖房用の薪切りが始まります。その伐採作業に私達が行くことになり、チタ市から五十キロの山奥へ三人一組となり、三十人がトラックに乗せられました。着いた所は小さな山小屋とか、入口は二重になっており、最初のドアを開けると、一メートルくらいの広場があり、更にドアがあつて、

十メートルくらいの奥行きとなり、通路があり、両方に丸太を半分にしたものが敷いてあり、内部は真っ暗で掘って建て小屋に等しいものでした。ある程度の高さに土を盛り雨をしのぎ、屋根の代用となっていました。電気がないので松脂や灯油を焚き、明かりを採りました。ここが私達の宿舎であり、当分、皆の休養の場所と寝床でした。

翌日からの作業は伐採でした。三人一組で鋸一丁と斧一丁。鋸は長さ一メートル、幅十センチ、二人挽きで、弓型となつて、二人で交互に挽くようになっていました。山に行くときと落葉松の密林です。直径五十センチくらいから一メートルを超えるものまであり、薪にはもったいないようでした。先ほどの鋸を横にして二人で根倒しをするのですが、生まれて初めての伐採、とりわけ二人挽きの鋸です、交互に押したり挽いたりするのですが、呼吸が合わず鋸が遊んで、なかなか幹に吸い込まれません。おまけに空腹と寒さで思うように作業は進みません。その上監視兵に「ダワイ、ダワイ（早く、早く）」と叱られながらの作業の辛さは当

人でなければ知る由もなく、情けない限りでした。

根倒しした大木は斧で枝を落とし、幹のみ二メートルごとに切断します。高さ二メートル、長さ三メートルが一人分のノルマでしたから、高さ二メートル、長さ九メートルが三人一組の百パーセント仕事です。これを達成しなければ明日の食事に影響があるので、健康な体力でも達成はなかなか困難でした。収容所にいた頃より幾らか食事は良いのですが、人間らしい食事にありつけないため、体の不調を訴える者も続出するようになり、寝ても覚めても食の話ばかりになりました。ぼた餅やお正月の雑煮餅を何個食べたとか、童心に返って語り、話だけで腹を満たそうとするアイデアではなかっただろうかと思っております。疲れてた私達はノルマの軽減をお願いしたこともありましたが、無駄でした。寒さが厳しく零下五十度を越えた日が三日ばかり続いたことがあり、毎日食事を運ぶトラックのエンジンが凍って、食糧がなくなったことがありました。その時は仕事は休んで、谷底より氷を砕き、運んで来て溶かして水を飲み、日向ほっこを

して過ごしたこともありました。

やがて暖かい季節となり、伐採作業も終わって元の収容所に戻りましたが、私は体力が低下、七十三キロの体重も四十九キロとなり、病人となりました。そのころ、弱い人から日本に帰す交渉がまとまり、昭和二十二年六月六日、帰国のため、ソ連領ナホトカより乗船し、昭和二十二年六月十五日、舞鶴に上陸、復員いたしました。

あまりにも疲れ果て、疲労のためか、家まで帰る途中の記憶は残っておりません。

走馬灯

東京都 岩田 博

駄馬は声無く 人を曳き

歴史の屋根を 幾そ度

絵巻は綴る 大黄河

衣星霜に 涙留む

一筋ここに 戦士有り

作戦、討伐に明け暮れた北支衣師団が、一部を残して山海関を後にして関東軍編成下の北朝鮮（威興）に籍を移したのは、敗戦も間近い初夏の頃だったかと思う。当時はのんびりとした日々を送っていた。

ある日突然命令が出て、完全軍装で山の中に展開した。後でわかったことだが、国境付近に上陸したソ連軍を迎え討つべく……とにかく命令は混乱していた。次々に変わる命令にやっと一呼吸している時に終戦の噂がどこからともなく聞こえてきたのである。武器引き渡し。部隊長の割腹自決。日まぐるしく時は動いた。

広々と見渡す限りの練兵場に、つながれた軍馬のいななき、主の手元から離れた動物たち……「あんなに可愛がっていたのに」人間なんて全く勝手なものだ。私も思っていたし、恐らく馬もそう思っていたに相違ない。

内地に帰れるんだ、そう信じ込まされて乗った貨物